

# 室生犀星、老年の生の言葉——入院記「黄と灰色の問答」「蝶紋白」——

九 里 順 子

初めに

近代の代表的な詩人・小説家の室生犀星（一八八九・明22・8・1—一九六二・昭37・3・26）は、生涯で三度、創作の爆發期があった。一度目は、『愛の詩集』（感情詩社 大7・1）『抒情小曲集』（感情詩社 大7・9）『第二愛の詩集』（文武堂 大8・5）と次々に詩集を刊行した時期、二度目は、「あにいもうと」（『文芸春秋』12巻7号 昭9・7）を嚆矢として、体を張って生きる人間を描いた小説、いわゆる「市井鬼もの」を旺盛に発表した時期、三度目が戦後の沈滞を破る契機となった随筆『女ひと』（新潮社 昭30・10）以降の晩年である。『女ひと』は好評で版を重ね、ベストセラーにもなった『杏っ子』（新潮社 昭32・10）『我が愛する詩人の伝記』（中央公論社 昭33・12）詩集『昨日いらつしつて下さい』（五月書房 昭34・8）『蜜のあはれ』（新潮社 昭34・10）『かげろふの日記遺文』（講談社 昭34・11）等、話題作を世に出していく。犀星の最後にして最大の爆發期であり、官能的で瑞々しい他の追隨を許さない独自の世界が拓かれている。

老年期に到って、見事な若々しい世界を現出させた犀星であるが、戦後の日記には老いや病に関する記述が頻出する。数えて還暦を迎えた年の詩「天うつごとく」（『至上律』5輯 昭23・8）<sup>註1</sup>には「何や彼とごたついた果に／終りだけは見へて来た／死だけが見へて来た／かがやいて女らが見へて来た／よく見て置かう／見てもあらはすことの出来ない／終りのあとさきを見て置かう」という件がある。死の地平が視界に入ってきた生の時間が「終りのあとさき」として捉えられており、やがて訪れる不可避な死と向き合う切実な意識が窺える。昭和二十九年一月十五日の日記には激しい胃痛の記述があり、二十二日に日比谷胃腸病院に入院、胃潰瘍だと診断され二月二十三日に退院する。「黄と灰色の問答」

『群像』9巻4号 昭29・4<sup>注2</sup>と「蝶紋白」(『文芸』11巻6号 昭29・6)は、この時の入院記である。

犀星は、「終りのあとさき」に入った時期に、どのように生と向き合い、晩年の文学を作り上げていったのか。本稿では、老年期の犀星最初の入院記である「黄と灰色の問答」「蝶紋白」を取り上げて考察する。

## 一 日記に見られる生と死の認識

「初めに」で述べたように、戦後の犀星は、昭和二十三年三月三十日から三十一年六月七日に至る日記を遺している。<sup>注3</sup>昭和三十一年に入ると、血圧、服薬、来客、原稿等、生活の覚書的な内容になるが、それより前のものはかなり詳細克明に心情も綴られている。還暦を迎えた「天うつごとく」の感慨以降、しばしば記されている老年期の生を巡る思いを辿ってみたい。

昭和二十三年には、次のような記述がある。

老人といふものは宣告された死刑囚の心理をいつも持たされてゐる。何時彼は所定の刑期に打つからなければならぬかの、歎みがたい覚悟があるものである。これは一応あきらめなければならぬ境にあることが不愉快である。六十まで生きていて未だ生きのびるつもりかといへば、然りといふより他はない、いくらでも生きてゐたいのである。生きてゐたいから死の酷たらしさも分り生涯をこまかに振りかへつて見ることも出来るのだ。(略) いたづらに死に従順であることは命を粗末にするものであり弱い人間がただそのまま眼をつぶる甲斐なき従順であるといへよう。  
(昭23・9・16)

まづいものを食べ、まづいものを書き、面白くも可笑しくもない生活をしてゐても、まだ生きていたいといふことは悲劇であらう、さういふ生活から何らかの面白さを引き摺り出そうとすることも、笑止千万な沙汰であらう、

そして一茎の草の枯れるのにまなをとどめることの、止むをえない性情の細かさがあったら、それだけで生きられるとしたら、人びとは滑稽だといつて笑つてしまふだらうか、

(昭23・11・11)

犀星は、還曆を迎えて生の本能を肯定する。生きる欲望に従うことが生を全うする大前提である。一方で犀星はそれを「悲劇」であると突き放した見方もしている。徒に刺激を求めるのではなく、平々凡々たる生活に立脚して名もなき命に細やかに共鳴することが、生きる実感であると記している。両義的な眼差しに加えて「それだけで生きられるとしたら」という命への共鳴力が古いの生を可能にするのである。それは、次に挙げる政治の不条理への健やかな憤りとも相関する。

かくのごとき(引用者注…A級戦犯の判決に対して)は運命といふよりは、すべてが斯うあることを彼等自身が彼等の軍事的知識からも、予期してゐたことであらう。立派な最後を遂げるであらうが、立派な上にも立派さを期待する。天皇はどういふ気持か、天皇こそつとも苦しみをもつて彼らの処刑と、受刑にたいして襟を正して何らかの自決的な表現をなすべきであらう、天皇の思い切つた表現が国民を動かし受刑者に最後の微笑をうかばしめるであらうが、何のあらはれもなく済ますとすれば人間としての、生きた天皇として見上げることが出来ない。

(昭23・11・13)

日本全体の処刑を選ばれた七氏が引受けてゐるといつてもよい、敗戦の責を負ふものはひとり東條氏らではない、皆が受けるものも含まれてゐるのだ。よき往生をいのらざるをえない。終身刑はまた何かの機会で生きられる日はあるが、死刑では何の機会も何の偶然の出来事の途も絶えてゐるのである。死ぬことは詰らない、これは真理とかいふ変挺なもののうちでも、ほん物の真理であらう、死と同時に犬も猫もそして人間もそこに何物ものこらない、

馬鹿でも生きてゐることは最大の名誉よりも、もつと、すぐれた名誉なのである。

(昭23・11・26)

犀星は、戦争の最高責任者であった天皇の声が少しも聞こえてこないことに、真つ当な疑問と怒りを抱き、責任を全て引き受ける形となった東條英機らの後生を祈る。この後の「死ぬことは詰らない」という展開が、直截な犀星らしい把握である。地に足を着けて生きてきた生活人の直観であり、「悲劇」でもあり本能でもある生きる要望を、命がある間は生き抜こう、生き切ろうという意志に変えていくのである。

昭和十九年七月に軽井沢に疎開した犀星は、昭和二十四年九月二十七日に東京に引き上げるまでこの地に滞在していた。昭和二十三年九月から十一月にかけての日記には、虫の捕獲と様態が詳細に記録されている。「多摩のきりぎりすこのごろ鳴かずなる。松井田のきりぎりすの一羽はべつの一羽の肩の肉をくひやぶつたが、べつの一羽は急に逃げることも出来ないほど弱つてゐて、肩に穴を開けられた。また別の一羽は胃腸を害して死んだ。肩の穴はくろずみ、夕方もまだ生きてゐた。」(9・1)「午后、剥製のため日光の中に出して置いたきりぎりすが、しとねの綿から這ひ出して少しくごめきを見せてゐた。まだ、ほんのすこしばかりの命があるらしい、かれらは老衰の時が永く命の消えるのに永い間かかるものだ。脚の先だけ生きてゐるといふ事実もある。しかし、今夜までは持たないであらう。日光で乾燥して来年まで取つて置くのが毎年の例になつてゐる。」(9・25)「すいちよ三疋、横になり脚をまげて死す。ひと夏の友はかうして消え失せた。羽根もいたみ、やつれはてた彼はただの草の葉のやうに穏やかである。約三十日くらゐ生きてゐた。(略) すいちよは顔もお腹も小さく、脚はすぐ折れるほど繊細に出来てゐるので、哀れみは却々深いのである。あまり萎びすぎて死ぬからである。」(10・4)と犀星は、虫が獐猛な生命力を見せた後、衰弱し、死に至る様相を執拗なまでに追っている。死んだ後も、翌年新たに虫が捕獲されるまで乾燥させて保管しておくのである。死にゆく虫を見届け、更に生の容器としての遺骸も保持することで、彼らの命を貪欲に摂取し、内面化していく感がある。犀星にとつては虫の命も人間の命も同じ重さであり、「一茎の草の枯れるのにまなこをとどむることの、止むをえない性情の細かさ」(十一月十一日の日記)の表れである。

生を生き抜こうとする犀星は、老年期の発見を日記に書き留めている。「六十になると何も彼もあきらめてゐると言はれてゐるが、それは嘘だ。ちから尽きてへタ張つてゐるに過ぎない。ただ、何事もがまんをする気の長さがやつと身について来てゐると言つた方が適當であらう。(昭24・4・25)」と六十歳の体力気力の衰えを実感しつつ、それに対応する甘受という態度が備わることに気付く。それは、「生きるといふことは僅かなことに気をとり直すことにある、詰らないことにしばらく気を奪られてゐる間はまだどうやら生きてゐるらしいのだ、生きることの大きさも大変だが、それをつないでゐることは実にとりとめのないものにある、此(ホ)んのちよつとしたものが生きさせるもを作つてゐる、これが一等大切なものであらう。(同12・28)」という生動するものに対する細やかな眼差しに支えられることでもあり、「一つの物をみがくことは、そこから見出す艶の濃さを愛するやうになれば、へいぜいの生活も文章の行を置きかへ、添削するのと何等のかはりが無いのだ。これらの愚直なしごとは自分でやらないと小汚いゴミタメで暮すやうな、だらしなさを繰り返すやうになる。(昭26・11・20)」という、生活と執筆が忍耐と持続のリズムを共有することの大切さに展開していく。生きる欲望が老いの実態の認識を伴うことよつて、老年の生きる姿勢を肌理細やかなものに押し上げていく。

老年の生は、細やかな共鳴力と持続のリズムだけで成り立つのではない。昭和二十五年六月十日には、ストリップを上演する新宿セントラル劇場へ行つた感想が記されている。「乳バンドと三角の銀の紙星を当てた裸の女が踊りだしたが、どれももうす睡たげな、もの憂い、仕方なしに踊つてゐるやうで、精気も生き身の美しさがみられなかつた、」と失望を述べている。「僕はいまの日本のやぶれた一つの裂け目を覗かうとして出かけたのであるが、そこには、やけくそな、どうにでもなれ、はだかになつて了つたつていいわといふやうな女の一人も見られなかつたのだ、裂け目から睡たげな、困憊しつづけたやうな女の人だちが僅かな練習を後生大事にまもりながら、半分ねむりながら踊つてゐるに過ぎなかつた。」と、敗戦とそれに続く連合軍の占領下の現実、生活は苦しく混乱した世相の中で体を張つて生きている肉体の美、失うものがないという地点で露呈されている肉体の美は存在しなかつたのである。ここには、肉体を通した犀星の時代把握があり、「今夜、講和条約なるもの発効、自由国民になれるとか、ワイワイいつてゐる。ちつとも応へな

い空虚なものである。」(昭27・4・28)という皮相な独立への批判に展開していく。

犀星がストリップに望んだものは、「臀部のあざやかさは二つの峯がせり合つた紫ココアの線によつて保たれる筈である。人間のからだはその臀部が下半身にある匿された「顔」でありそこに未来までへの掘りつくせない、たうてい、男性の年齢のとどくかぎりに於いても達しきれない美事な無限があるはずだつた。」という生を生み出す根源的なエロスであつた。直截な生々しさが思想に直結しているのが犀星の特徴である。昭和二十七年五月二十八日、六月二十日も、浅草にストリップを觀に行つた記述がある。昭和二十六年二月七日の日記には、「ゆうべ気がつくつと寢床のなかに、誰かが立つてゐるのか、靴下をはいた足が手にさはつたので、起き上らうとすると、いきなり擧丸に両手をかけられ、抜き取られようとして身を跪いて叫び声をあげた、目がさめてからゆめの中で自分の叫び声があまりに乱次ないのに呆れた。」という夢が記述されている。衰えていく性を表徴する夢である。夢のみならず、同年五月四日の日記には、庭で植木屋の手伝いをしていて「気がつくつと植木屋の股引のふくれたところに彼のキンタマがあつて、ふいに掴んでみたらどんな顔をするだらうといふ悪戯気が起つたので、すぐ、そばをはなれた。」と同輩の男の性器に鏡像のような関心を持った件があり、自分の性についても直截に捉えようとしている。生きる欲望と老いの実態の認識は、地道で忍耐強い肌理細やかな生活のリズムを作り出すと共に、根源的なエロスの探求に到る。

## 二 「黄と灰色の間答」における生と病

犀星は、昭和二十八年一月二十日の日記で、「百田宗治の六十歳の会の通知をうけたが、六十歳といふ年は七十から見れば小僧つ子だし、五十から見れば老人であるが、どつちつかずの凡くらの年である。(略)今年は僕も六十五になつたが、べつに驚くほどでもないが詩人仲間では、福士も死に萩原、佐藤、千家、福田といふやうに、皆さんが早くも出立してゐる。ついでにこちらはまだ生き抜かうとしてゐるから、大した根性である。」と六十代半ばを迎えて還暦という年を「どつちつかずの凡くら」であると捉えている。六十五歳から見れば、六十歳は大きな節目というよりも本物

の老年に到る一つの通過地点である。

それは、犀星が健康な体でこの時期を過したという事ではない。昭和二十五年、二十六年の日記には歯痛と抜歯の記述が、昭和二十七年の日記には胃痛と高血圧の記述が頻出する。「朝九時バンサインを服んだ、六時間置きに服用、この薬もあと一年も経てばもつと低価格で入手できるのであらう。どの程度に効くか、一週間続けて見るつもりである。こんな薬にも生きるための信頼を得ようとするのか、生きてゐるあひだは胃に苦痛なく生きてゐたいからである。(略)痛いところを毎日痛がりながら生きるのはばかだ。」(昭27・1・6)「血圧が百七十五もあることは、まるで知らなかつたことだ、こいつを発見したことはまだ命があるものらしい、かういふ機会にやはり療治をしておき、ボロボロの命を継ぎ足して見るべきである。死は損失であり何にもならないむだごとである。」(同4・1)「胃はきのふより快いが、厄介千万な胃ぶくろである。いづれ、こいつのために往生することになるだらうが、六十年もつかつて居れば、たいていの布ぶくろでもボロになるものである。」(同5・21)と数えて六十四歳の犀星は、胃痛と高血圧に誠実に対処しつつ、「ねてゐるわけに行かないで起きる。ふだんと同じ調子であるが、やや、だるさがある。ほとんど平熱、」(同6・13)と執筆を続ける。犀星の肩には、犀星、とみ子夫妻の生活のみならず、昭和二十三年十一月に青木和夫と結婚したものの生活費の不如意が続く長女朝子、長男朝巳の生活がかかつていた。昭和二十六年三月十二日の日記にも、「金がいつても他に貯へることが出来ないのだ、猛烈に仕事を始める。この原稿料で現金を作らないと、どこにも金がないのだ。」と記されている。朝子は二十八年一月には青木と別居して室生家に戻り、翌二十九年十二月には離婚して室生家に復籍<sup>注4</sup>する。

犀星の胃痛は、昭和の初年から始まっている。昭和六年三月四日の日記には「昨夜から腹痛あり、午後になるもシクシクたる疼み去らず。夜十一時頃烈しい胃痙攣に変わる。久振りなれど耐へ難し。小関さんに使を出して頓服を呑む。」とある。犀星は、じつと机に向かう職業病と長年付き合つて来たのである。持病と故障、止める訳にはいかない執筆生活は、「六十を過ぎると、なにごとにも死にかかはつたものを感じるものらしく、そんな傾きがある。さらば、それにかかはるのも面白い。何をつくるにも、ものを見るにも、念を入れてよく見たり、見まちがひなくするのがそれだ。」

(昭27・1・30)「生きてゐる毎日をくひちらすことだ。念入りに何にでも聴きすますことだ、それより外に自然をたのしむことは出来ない、」(同7・28)という加齢による変化に徹底して向き合つていこうという肝の据わりを作つていく。昭和二十九年一月十六日、十七日には、入院に繋がる次の記述がある。

胃痛依然、寺尾医院から投薬をもらひ服用したが、その間だけでたちまち痛んで来る。この痛みに永年なれてゐるので仕事も折々に書く。

あまり痛みがしつこいので、久振りで診断してもらふ手筈を朝子がしてくれる。癌だつたりしたらかなはないが、どちらにしても診るだけは診ておかなければならない。(昭29・1・16)

胃痛はげしく小池医院まで行つてみたが、盲腸の手術中で戻る。薬を服むと一時間くらゐらくであるが、すぐ刺すやうな疼痛がやつて来る、こんどのやうにしつこいことは初めてである。ガンか、ガンがもう拳くらゐ大きくなつてゐるのではないかとも思ふ。折口さんのガンも二ヶ月くらゐの間に、拳くらゐ大きくなつてゐたさうだから、ひよつとすると、ガンではないかと思ふ、ガンならガンでもかまはない、誰かにくれてやる命だらうから、持つて行かれても苦情のいひやうがない、(略)ガンか、ガンちくしよか、こいつは永い間うろついてゐた奴である。(同1・17)

犀星は痛みの激しさから癌を疑い、折口の死因も脳裏に浮かべつつ、開き直りと恐怖の間を揺れる。「ガンちくしよ」と病を擬人化することが、意識下にあつた疑念を表出させていることが注意される。虫の観察同様、人間ではないものも人格化することによつて、観察という視点を得ることが可能になるのである。その上で、犀星は対象を自分の内部に取り込んでいく。

翌十八日には寺尾医院で胃カタルと診断され注射を受けるが、犀星は、止まらない痛みから「寺尾医師はガンも腫瘍もないといつたが、最近にレントゲン撮影の必要があらう。」と承服していない。十九日も続けて注射とブドウ糖の注

射、小池医院でブドウ糖と痛み止めの注射をされるが、効き目はなく、痛みは激しくなる一方である。「入院しないとらしくならないかも知れない。」と入院という手段を思い始める。二十二日は浅田漢方医から「右ノ胃のハジに潰瘍ある由」を告げられ、「いつまでも苦しんでゐても、ただの苦しみに終るので、日比谷胃腸病院に入ることにした。河島院長に紹介してもらひ、一室を得て看こふを一人やとふことにする、」と入院を決断する。その日の午後に入院して診察を受けると、「胃潰瘍、それも相当に大キイ穴」だったことがわかる。

「初めに」で述べたように、「黄と灰色の間答」「蝶紋白」は、この時の約一ヶ月の入院記である。犀星は、入院中からこれら二つの小説を書き始めている。「黄と灰色の間答」と題した入院記がやや見当がついた、医者 of 来ない間に盗人のやうに書いた小説。」(昭29・2・9)「けふも原稿をかいてゐるが、ここで原稿をかかないであらう、たいくつなことであらう、「黄と灰色の間答」と「円舞曲ガン」二篇で病院生活をつくしたつもりである。」(同2・14)「群像」松本道子に「黄と灰色の間答」をおくる。三十八枚。」(同2・18)「円舞曲ガン」四十枚となる、(同2・19)と、入院治療の間に着々と執筆は進んでいる。退院後の三月四日の日記には「円舞曲ガン」をあらため、「文章病院」とした。その方が素直であたりがよいからである。」とあり、退院してみればタイトルのあざとさに気付いたが、入院の最中は癌への恐れと疑いに振り回されたという思いが前面に出たことがわかる。「文章病院」は、更に「蝶紋白」に改題される。同日の日記には「入院中、「黄と灰色の間答」三十八枚、「文章病院」四十八枚、「虫姫日記」二十八枚、雑文二稿八枚を書いたが、三十日間で百二十四枚書いたことになる、一日四枚医者 of 眼をぬすんでした仕事である。これだけの原稿料はそつくり病院に支払つたやうなものである。うっかり病氣もしてゐられない、糧道はねた翌日から止つてしまふからである。」と文筆業の厳しい現実が記されている。犀星は、一貫して強靱な生活人であった。生活人の生命力を介して老いの認識もエロスの追求も世界観も形成されていくのである。

「黄と灰色の間答」は、「ガンではない、潰瘍ですね、それも古いのがあたらしくくづればじめてゐるのでせうね、お茶も玉露のやうなものが多量にはいつてゐるし、バターも過ぎてゐる、」という漢方医の診断の言葉から始まる。日比谷病院入院後

のレントゲン医師の診断で、漢方医の見立ては妥当であったことがわかるのだが、最悪の予想は外れたという地点から、「彼」の意思が固まる。「彼」は病院に百枚の原稿用紙を密かに持ち込むのであるが、それは、「百枚あれば足りる。そして百枚あればこの胃袋を引つくり返しにして見るだけのものが取れる。次から次へと書きつづけて治療をつづけることは止むをえない。書いた金で悪疾を削ぎ立てることに遠慮はいらない筈である。」という自転車操業を病院にも持ち込む入院生活である。

彼が書いては金を取り治療をつづけてゆく状態と、治療しながら休まずにはたらかなければならない胃袋とは、どちらも因果応報であり腐れあつた二人づれであつた。六十何年もつかひ果した乞食袋は下げるだけ下げて歩いてあげく、何処かの果に辿り着いてゐるやうである。

「胃袋」も「彼」の道連れとして人格化される。それは、生活習慣の継続こそが生の時間を延ばしていくという自負であり、精神と肉体が一体化した感受性の姿でもある。この自負は、レントゲン医師が勧める外科手術の拒否を選ばせる。医師は、「たつた一時間の手術と瓦斯ガスの出るまでの一二日をあなたの生涯の一等いやな日にしても大したこともない筈ぢやありませんか、きれいな薩張りササと決り取つて第二段の生涯に足を踏み入れられたらどうです、(略)あなたくらゐのリアリストがそこまで進んでなならないことが腑に落ちない、あなたなぞ誰よりも切開手術をなさるやうなお仕事の立場ぢやないんですか、」と「彼の不徹底なよわいところを衝いて」くるが、頑として拒絶する。

「あなたくらゐのリアリスト」「切開手術をなさるやうなお仕事」とは、小説家の本質を的確に捉えた言葉であり、作者犀星は医師にそのように言わせることで、リアリストぶりを發揮する。内科療法にこだわる「彼」の決断を「出来るだけ痛い目にあはずにとにかくも、疼痛だけを抜き取つたあと何ヶ月でも何ヶ年でも生きてゐたいといふ、ずるい消極的なかんがへであつた。」とその場凌ぎの不適切な認識であるとも批判している。「病人といふ奴は何時つねに半分ヤケ気味で半分は懸命に全快といふ境に縋りついて行くものである。いまの彼は手術しなければならぬものから避けて

行き少々ヤケに生きようとするのである。ヤケ気味になることは療法の苦痛を骨抜きにするために、或いは永びくかも知れない命を少々ちぢめてもよいといふじだらくな考へなのである。こんなことを人びとが聞いたら呆れてしまふであらう、」と病人の心理に添って、得体の知れぬ手術への恐怖が適切な施術に優先すると述べつつ、第三者から見た愚かさを記すことも忘れない。長年の持病に馴染んだ身体が基準であり、病巣を取り去った新しい肉体は受け止めることができないのである。犀星は、老年期の肉体が合理的な施療を超えて、ここまで培ってきた自分を保持するという意味を持つてしまうことを描いている。「余りりかうでない解釈」であり、「あたらしいのちを無駄にするやうだが、これも彼といふ一人の人間の生き方であるとすれば止むをえないことである。」とこれまで生きて来た人生観によって治療方法が選択され、生き方として引き受けることになる。

医師との会話は、「硫黄色のぼんばりのやうな光線」が差すレントゲン室で行われる。「硫黄色」の不気味さは、生と死のいずれに分岐するか不分明な状況の表象であろう。この作品の「黄」は不分明な「硫黄」で始まり、この後で触れるが、薬の副作用による閉尿が好転すると、命を繋いでいく仄かな光に変わっていく。「彼」の病院食は、「牛乳とスープとおまじりに果汁」であり、「彼」は食事を運搬する車を「たからの車」「あつものの車」「飯車」と呼んでいた。比喩と即物的な呼称が併用されているところが、小説家にして詩人である「彼」らしい。食事は、次のように描かれる。

たとへば食塩といふものを振りかけるために、つかつてよいことになつてゐたから、彼はおまじりにその食塩をふりかけることによつて、おまじりの味は撩乱とかがやいて来て、おまじりといふものが、満開のさくらの花を見るやうであつた。彼はそれを一さじあて馬鹿面をして、やぶれた胃ぶくろにとどけてゐた。これら四種類の流動物に、黄ろい半熟の卵がついてゐたが、こいつは六つ切にすると二号活字くらゐの小ささになり、それを匙の上にくろがし殆ど戯るやうにして、嘔みくだいてゐた。月夜のやうなこの味ひは味ふひまもなく、すぐに消え失せた。

おまじり（薄い粥）は、塩を振りかけることで「満開のさくらの花」となり、「黄ろい半熟の卵」は「月夜のやうな」

味わいとなる。味覚と視覚が渾然一体となつて、審美的な世界に変容する。それは、細々とても昨日から今日へと命を繋いでいる実感であり、詩人の眼の維持である。

「彼」が入院している病院は、「窓先のビルディングは真白な九階であり、左手のビルは少々よごれた八階だつた。そしてこの病院は古城のやうに鼠色をおびてゐて、その三階から毎日古鉄材と古材木を引摺つて歩く電車とバスと、一分間に六七台は馳はしるくるまの音と警笛とで、窓も病室の中も一杯であつた。」とビルに囲まれた鼠色の「古城」として形容される。「彼」は、「かういふ東京のまんなかに起臥したのははじめてであるが、全くこれでは町家の人もよくねむれないであらう、」と感想を洩らし、十数年前のハルピン旅行でのホテル滞在を思い出す。「彼」ならぬ犀星は、昭和七年四月に大森谷中から大森馬込に転居し、以来庭を丹精しつつ日本家屋に住んでいたので、鉄筋建築三階での病院生活は、異国のような思いがしたであろう。葉の副作用で閉尿に苦しめられた「彼」は、「寝台から窓のあるところまで、二メートル半あつた。そしてここは三階で地上はコンクリートの街路になり、ひと息に飛び降りてしまへばぐつしやりと潰れてしまふ、訳のないことである。一分間がかたがつく、彼はこの一分間といふ時間がなんと素晴らしく、そして貴重でいやらしい時間だらうと思つた。」と余りの苦痛に死を夢想する。非日常の「古城」は、短絡的な苦痛からの解放も夢見させるのである。しかし、付添いの看護婦の知恵によって膀胱を懐炉で温めて尿が出ると、「彼はこれこそ生きる力が試ためされたやうな気がした、」と今日から明日へ命を繋いでいくささやかな自信が生まれる。それは、他の手術を待つであろう高齢の入院患者の「勇敢さ」を認めつつ、「彼は彼流の生き方をして腹を切開したり胃袋につきを当てたりする、それ自身にからだの歴史にはないやうなことはしたくなかつた。彼は彼の歴史をこの儘たとへ時勢にはなくとも、そつと、まもつてゐたかつた、」と自分の判断を確認する自己肯定に繋がる。ここでも「からだの歴史」と「彼の歴史」が等価である犀星の肉体的思考が一貫している。

生の継続に肯定的になつた「彼」は、「も一つ彼の病室から出たことがないが、天災地変の時にこの古城からどういふふうに通れるみちをえらんだらいいかといふことを、暇さへあれば考へてゐた」ので、「この堅牢な古城」でその下見を実行する。階段の幅は七尺、踊り場の広さは四畳半というゆとりに安堵し、裏階段を確認し、屋上から降りている

梯子形式の階段が「おもに二階三階の人が天変の折につかふために作られてゐるもの」であることも知る。外科手術ではない内科治療でどんな効果が現われるか、結果はまだ出ていないのであるが、非難経路を確認する「彼」は生きる方向に針を振り、リアリストの眼で行動するのである。

「彼」は外を眺めて、次のような感想を抱く。

大阪ビルの側面がそのいらか屋根をそろへて見えるのも、煉瓦が煤ばんだ湿気をおびて美しい偉観であつた。彼はこの古城にねてゐて少しも憂慮を感じないで、のびのびと都会のまん中にゐられるやうな気がした。古城のまはり  
が悉くビルヂングの塔壁の中にあるのも、暖かつた。

鼠色の「古城」は、自分を閉じ込める堅牢な建築ではなく、安堵して都会を実感する居心地の良い居室に変わる。病院もビルディングもひと続きのリズム、空間と化するのである。「硫黄」の黄は、体調の好転を介して「黄ろい半熟の卵」の「月夜」の味わいに変わり、安眠できない「鼠色」の古城も「美しい偉観」に溶け込んだ「暖か」な風景の一部と化す。作中では「鼠色」であるが、表題では「灰色」であるのは、「鼠色」に付随する伝統的なイメージを避けて「黄」と対になる中立性、抽象性で揃えようとしたのではないか。それと共に、「黄と灰色の間答」という題名は、死の恐怖と生の希望を行き来しつつ、病院を象徴する二つの色の色調が変容し、生きる針が生に振られていくプロセスそのものを表している。

### 三 「蝶紋白」における散文と詩

「黄と灰色の間答」が、病院という死と生が同居する空間を描いたのに対し、「蝶紋白」は、看護婦との対話を中心としてその中の人々に焦点を当てたものである。冒頭、「医者は平常あらゆる生活の中で嘗て誰人からもたしなめられた

ことのない彼に、いつもベッドの上に起き上り、タバコをふかし濃い玉露をすすつてゐるのを見附けて、煙草を禁じ茶を禁じ起き上ることを禁じて去つた。」と医者の指示に従わない頑固な患者として「彼」が描かれている。従わないどころか、「医者が行くと起き直つてかんごふの栗山さんに、ビスケットを一個という注文をし、さらに茶をいれてくれるやうに言ひつけた。」と自分の生活スタイルを崩さない手の焼ける患者ぶりである。

背景となる犀星の日記を見ると、「けふはじめて痛みがなくなり、呆れるくらゐ平安な日をおくつた。ちやうど入院十九日めである。奇蹟にぞくするであらう。／「黄と灰色の間答」と題した入院記がやや見当がついた。医者の来ない間に盗人のやうに書いた小説」(2・9)「胃痛、けふもらくになる、明日再度のレントゲン撮影、けふから卵黄一つだけふやしてたべても、よい由。」(2・11)「二回目のレントゲン撮影、主治医は潰瘍は治りかかつてゐるが、院長まで言つておくことがあると言つた。／院長回診の折、潰瘍のあとからガンの細胞らしいものが覗いてゐるから、もうしばらく入院せよといはれた。(略)／病院物の続きをかきはじめる。」(2・12)「けふで無痛状態が五日間続いた。／ビスケットとクラツカを食べてもよい由、ビスケットは鳥度あまくてうまかつた。あまいものは三週間ぶりである。」とある。時間的にも「蝶紋白」は「黄と灰色の間答」の続編であり、癌の細胞らしきものの疑いのあるもの、快方に向かつてゐる時期の入院記であることがわかる。この後も、「けふ、はじめてひらめ一切とお粥とつく、二十五日ぶりでさかなといふものを食べたが、うまいものであつた。」(2・15)「けふはじめてパン食、バターは向日葵のやうに口の中にとける、バターがこんなにうまいものと思はなかつた。」(2・16)「ビスケット、を食べて見る、うまい。クラツカも同じ。明日はカステラを試食すべし」(2・17)「カステラをたべてみたが、うまかつた。／けふで無痛の日、十日間をかぞへた。もう大丈夫であらう。二十三日退院の事、院長まで申入れることにした。」(2・18)と日に日に調子が上向きになり、退院の目途もついて来たことがわかる。「彼」の強気は、作者のこのような健康状態が反映されており、人々を観察する余裕も出てきたということであろう。

そんな「彼」の眼に看護婦の姿は次のように映る。

病院附のかんごふは髪に純白のかんむりのやうなものを冠り、白い靴をはいて毎朝やつて来る、修道院か何かの風俗の型をとつたものらしく、うしろで白いつばさのやうに結び目を蝶のやうに展げてゐた。この清潔なすがたほど、患者をきりつとさせるものはない、

「蝶紋白」とは、看護婦の姿の形容であつたことがわかる。第一節で触れた、日記に記された虫の記録からも窺えるように、犀星は、小さな生き物を愛好した。蟋蟀やきりぎりすが命の果てを見届ける対象であつたのに対し、蝶は、美によつて命が甦る対象であつたらしい。昭和二十八年三月二十三日の日記には、「黄ろい小形の蝶舞ふ。こんな美しいもの生きてゐることに驚く。この驚きは年老つた老ぼれが出直したやうな驚きなのである。年老るとすべて美しいものに出直して眺め驚く、あはれな驚きである。」とある。かなり前に刊行された随筆集『文学』（三笠書房 昭10・9）所収の「丸の内」<sup>注5</sup>からも犀星の紋白蝶に抱くイメージが窺える。

蝶はねぐらをもたない不良少女のやうによれてしまひ、美しいボロを引きづつて立つて行つた。

「煤よごる蝶紋白や丸の内」

僕はくるまの上でまた、「昼ねむき蝶紋白や丸の内」と訂し、さらに「煤よごる蝶のねぐらや丸の内」と直した。僕の眼は歩道の白い照り返しに痛んで、子供のやうに眼をほそめて遠景の濠端の波に憩みをとつてゐた。

昭和初年代の犀星は、詩集としてはモダンイズムを受容した『鉄集』<sup>くろがね</sup>（椎の木社 昭7・9）を刊行しており、「丸の内」もその系列である。散文詩の中に俳句も織り込まれており、レトリックと構成において三好達治の影響を感じさせる。犀星が入院していたのが日比谷病院という「都会のまん中」（黄と灰色の問答）であつたことを考え併せると、「蝶紋白」というタイトルにはモダンな丸の内の情景というニュアンスも籠められていると言える。

紋白蝶のイメージが、「彼」に詩の言葉を発見させる。

彼は洗腸の必要をのべ、腸が張ることをうつつたへると、彼女は注射の容器をかたづけながら、片手間の返事らしく先刻とおなじくあひで、平仮名の一字づつに空間を置いて見習看護婦にいつた。おかんちやうしてあげて……彼はこのして、あげてといふゆつたりした言葉づかひと、お洗腸の、お、といふ不思議な冒頭の一字をまだ嘗て聞いたことがないので、妙なところに妙な文字のうつくしさのあることを知つたのである。彼は毎日の注射をうけながら彼女と話したこともなく、また彼女も忙しいのでほんの一言か二言くらゐしかはなさなかつた。お痛かございませんか、とか、注射液が冷えてゐるのでつめたかありませんか、注射液を一本にみんな入れてあるものですか、お時間が永くなるのでお痛いでせう、とか、いふくらゐがせいぜいであつた。にもかかはらず彼はけふのそれが平常我々が詩とか何とかを頭の中にさがしまはつてゐても、決して見附からなかつたものであつて、実際の人と人のあひだにうたはれてゐながら、それきり失くなつてしまふ記憶すべき一行だつたのである。

詩の言葉がふいと業務の言葉から立ち上がつてくる。詩の言葉は固定したレトリックとしてあるのではなく、実際に交わされる言葉から発見される生々しい詩の現場が描かれる。「彼」は「氣を付けてゐると人間はたいせつな言葉を、どれだけ多くのものを毎日失うてゐるかかわからない、そしてそれは後では捜しやうもないのである。」と言葉の響き、間、リズムといった肉体的性が一回的な表現を作り出すことに思ひを致す。「彼」は紋白蝶のような看護婦が最初に放つた言葉も、次のように反芻する。

彼は彼の文章に刺戟をかんじ、ひとり言をして言葉のあとを小時趁うた。あかるい　ところに　立たないで、…これは彼の文章といふあかん坊のためには、氣のきいた子守うたのやうなものである。そして患者である彼自身へは、おかんちやう　して　あげてといふ第二聯の詩がくちざまれたので、彼と一しよに病院にはいつた彼の文章もいま一服のくすりを服んだのと同じであつた。

詩の言葉の発見は、直前の発話も詩に変える。「非常にゆつくりとした言葉つきで、それも性質のゆるやかさの現はれとして、幾つかの文字を空気のあひだにならべた。」という印象が詩として認識され、詩人としての「彼」の意識が活発に動き出す。

「平穏な退院の日をかぞへてゐる彼に、週期的な便秘の憂鬱がやって来た。」という便秘の解消のために「石鹼浣腸」を試みるが、看護婦に従わないために失敗し、「彼」の要望で「グリセリン浣腸」を試みるも同じく動いてしまったために失敗し、「ほじくる」手段を強行せざるを得なくなった場面がある。犀星は、「彼」と「かんごふの栗山さん」の会話を構成している。

「寝台から降りてはいけません、あ、また降りておしまひになつた、床の上でどうなさるおつもりです、ぢや、しやがんでゐて下さい、いや、四つん這ひになつていただかないと何も出来はしません、四つん這ひになつて下さい。」

「四つん這ひになれといふのか、失敬なことをいふ。」

「もう些ちよつとです、四つん這ひになつて下さい。」

「これでいいか。」

「ぢつとがまんするんですよ、息をおつめになつて。」

「あ。」

「ちからを入れてください、全身ですよ」

「あ、苦しい。」

「もうちよつとです、ほら、そろそろらくにおなりでせう、すつかり出ましたわよ。」

この件は、日記（二月十九日）には、「けふ再度の浣腸をしたが効かない、看ぶ婦が掘じるといつて、肛門に指を入れて掘つてくれ、やうやく通じがついたが、この間の一時間は苦しくゲツソリしてしまつた。（略）「円舞曲ガン」四十枚となる、／かんごふの掘じるといふことは、そのしごとのの困難なのにつくづく感心する。」と看護婦への感謝と感心が簡潔に記されている。それが、小説では「栗山さん」の畳みかける命令、「彼」の弱々しい抵抗と受け入れ、「栗山さん」の励まし、「彼」が思わず洩らす声という丁々発止とも言うべき対話の連続で、不淨物の排出作業が格闘する肉体と化していく。「彼」は「これは一体何といふ職業なのだ、縁もゆかりもない人間の苦痛を取り除くために、医者にも出来ないしごとを取行するために自分の疲労体力まで賭けるといふことは、一体どういふことだらう、彼はいつも栗山さんのいふふしぎな言葉を胸にかんじた。それは患者が便秘すると彼女自身も便秘するといふことであつた。そして患者の下痢がつづく彼女もまたその下痢状態に健康が持つてゆかれるのである。」と患者の肉体と運動して自分の肉体も変化する看護婦という職業に畏怖の念を抱く。「栗山」と「彼」の対話は肉体の協同作業であり、打てば響くりズムを形成していく。

看護婦から紋白蝶が飛び立ち、業務の言葉から詩の言葉が生まれ、詩の言葉が連打されていく。入院生活という非日常空間の中で、犀星は、散文と詩を往還し、生きた詩を逃すまいと捕獲する身体になるのである。

小説の終り近くで語り手は、「赤ん坊は夜が明けるとすぐに目をさます、老人といふものも、夜が明けると間もなく起きてしまふ。赤ん坊は生きるために夜明けといふりんくわくの外側に足を踏み出して暴れる、老人は一日といふ時間を少しでも余計に生きたいために、もう庭に出たり畠に出たりしてゐる。この二つの世界で目先のない奴と、たつぷり先のある奴とが、うしろ向きになつて蟹のやうに横這ひをつづけてゐる、彼も実は老いたる蟹の一疋であつた。」という感想を述べる。「老いたる蟹の一匹」という形容は、絶筆「老いたるえびのうた」〔婦人の友〕56巻4号 昭37・4の「さやうはえびのやうに悲しい」「生きてたたみを這うているえせえび一疋。／からだじゆうが悲しいのだ」という表現に繋がっていく。

小説の最後で、「彼」が娘の世話になつているのが自分の日常だとつらつら思つてみると、突然「そんなにお苦しか

つたら、ね、一緒に死んであげませうか、」という「一行の会話」が頭に浮かんだ。これは、「彼」が伝え聞いた「十年も苦しんでゐる若い有名な文学者であり良人」に「顔をよせていつた」妻の言葉である。「彼」の次の感想で小説は終わる。

人間はうそでかたまつてゐるやうな動物であるが、ひとたび、その嘘がほぐれてしまふと、全く死んでくれる人さへあるのである。そのやうな人をおめおめ死なせる人もゐないだらうが、この言葉の一行はどんな小説のなかにも発見できないものであつて、彼はうそでもいいからこんな言葉に出会すために生きてゐたのではなかつたか、生きてゐるからこの言葉がふるひ附きたくなる、麗しさを見せてくるのではなからうか。

「うそ」から出たまことこそがその人を生きさせる言葉であり、小説家は「うそ」をまことの言葉に詩の言葉に変える存在である。生きてゐるからこそ、虚の言葉を取り込んで、まことの言葉に血肉化することができる。「彼」の言葉は、この後の犀星の作家活動における作中人物との向き合い方、関わり方を示唆している。

### 終わりに

還暦を迎えた犀星は、老年期における病がちな肉体や気力の衰えを率直に日記に記す一方で、生きる欲望を全面的に肯定し、老年の人間が今日から明日へ命を繋いでいくための肌理細やかな眼差しとリズムを体得していく。それは、世相に対する健やかな批判意識と共にあり、犀星が強靱な生活人でもあったことを示している。

犀星は胃潰瘍で一ヶ月余り入院することになったが、外科手術ではなく、自分が納得できる内科療法を押し通し、自分の来し方が治療の選択と不即不離であることに気付く。死の恐怖と生の希望を行き来する中で、快方の兆しが見えてくると、自分の生の引き受け方に安堵と余裕が生まれ、病院の業務的なやり取りから詩の言葉を発見し、嘘とまことを

反転させる詩の次元の追求へと犀星を押し上げていく。

犀星にとって、老年期と向き合うことは、老いの実態と生の欲望、死の恐怖と生の希望、散文の言葉と詩と言葉を多面的に往還しつつ、新たな詩の言葉を獲得する始まりであったのである。

注一覽

注1 引用は『定本室生犀星全詩集』第3卷（冬樹社 昭53・11）による。

注2 「黄と灰色の問答」「蝶紋白」の引用は『室生犀星全集』第9卷（新潮社 昭42・8）による。

注3 日記の引用は、昭和二十三年九月一日～昭和二十七年六月二十三日、及び昭和六年一月一日～五月十三日は『室生犀星全集』

別巻1（新潮社 昭41・5）、昭和二十七年六月二十四日～昭和三十一年六月七日、及び昭和二十三年三月三十日～八月三十一

日（昭和二十三年補遺）は『室生犀星全集』別巻2（昭43・1）による。

注4 犀星、朝子の年譜は「年譜」（『室生犀星全集』別巻2）による。

注5 『文学』（三笠書房 昭10・9）所収の「桃印詩集」（二十篇）の一篇。初出は未詳。引用は『定本室生犀星全詩集』第2卷（冬

樹社 昭53・11）による。

注6 引用は『定本室生犀星全詩集』第3卷による。

※引用に際して、原則として旧字体は新字体に改めた。